

サピ Spiritual

VOL 1 2010 Winter

「仏教って おもしろい。」

仏教愛をまな板にのせようと思ったら、奇抜なタイトルになりました。2009年8月、フリースタイルな僧侶たち と題した冊子を発行した尼崎の浄土宗僧侶、池口龍法さんは語る。大学時代に出会った多宗派の先輩・後輩僧侶やライター仲間と編集。飲食店等での紙媒体の設置に留まらずインターネット等で(フリースタイル)でフリー(無料)に配布を始めた。

2号を発行した10月にはトークイベントを企画し、冊子の連動する場へも関心が広がった。マスコミ取材が殺到したことも重なり、設置店舗も増え、支援者の会も組織された。部数は創刊号の150部から、2号は500部、12月発行の3号は600部と増刷中。「今後は、お坊さんの研修をやりたいですね。教育や介護の見聞を深め、やさしいことばをかけられる僧侶が増えればいいな、と」

志は篤い。

「フリースタイルな僧侶たち」内容がネットでも読めます。



1月30日の18:30からのトークイベントのゲストで
應典院に来山。http://comm onsfesta bbgspot neにて

http://www.freem onk.net





仏教の 可能性とは 何か。

死者との関係を問 直す。

末木さんは基調講演で、「現在の葬式仏教は期限切れ、過去のものではないか。もう一度死者との関係を取り戻し、葬式仏教の果たしてきた役割を正当に評価してもいい」と話しました。また「葬式仏教は近代社会の内側から底辺を支える非常に重要な機能を果たしていたが、家意識の希薄化した現在は、その意味合いは大きく変容していると示唆しました。釈さんも「時間のリアルな肌感覚がどんどん短くなっている」と危惧を表明し、子どもの頃に死者儀礼をおもしろくもないのに、じっと座って我慢するというような「宙づり感覚」が「われわれの時間の肌感覚を伸ばし、鍛えてきたのではないか」と話しました。

また、社会参加仏教について、末木さんは「ワンパターンではなく、いろいろな形があってもいい」とこれからのお寺の役割に期待し、釈さんは日本型のそれとして「應典院のようにいろんな人が交錯して運営に参加していくような形にすすむかもしれない」と見方を示しました。

仏教を哲学的に考察しながらも、そこから現代社会にどう糸口を見だしていくか、ふたりのスリリングな対論に会場は心地よい緊張感が張り詰めました。

「ヨーロッパ哲学のように『あるかないか』が問題ではなく、どういふふうに分人たちの関係を持つのか、持たざるを得ないのか、それが問題になる」「あるかないかを問題にしないことが『空』で、『空』と『縁起』は理論的に同じことになる。それが一番根本で大事なこと。別の言い方をすると、白か黒か、どちらかが正しくてどちらかが間違いとするのではなく、正しさの論理を捨てることだ」

近代的なものの見方や価値軸を反転させる、仏教の柔軟な可能性を改めて感じさせられた対論でした。

毎日新聞 2009年 10月 28日「心のページ」より抄訳させていただきました。

2009年9月13日、
應典院では半年ぶりの第56回寺子屋トークを開催、「対論！仏典から現代社会を問う」と題して、
国際日本文化研究センター・末木文美士さんと、
浄土真宗本願寺派如来寺住職・兵庫大学教授・釈徹宗さんが語り合いました。
碩学と気鋭の仏教学者の初顔合わせとあって、
本堂ホールは両名の聴講者の熱気が渦巻きました。



仏教に可能性はあるか？

Spiritual
Opinion

大前敏行

Toshiyuki Ohmae

会社員。1953年生。92年、仏教を探求する「東洋思想文化研究会」。99年、「チベットを考える大阪の会」結成に参加。現在、仏教を考える個人紙「無明通信」を発行。

6人の市民からレポート

如是
我聞

仏教から現代思想へと架橋する、ふたりの初対論から何を感じ取ったのか。140名の聴講者の中から、独自の観点を持つ6人の市民からコメントを寄せていただきました。

寺が消えていく時代から
市民が問う仏教の新時代。

仏教ブームの陥穽

最近、地方の寺で仏像の盗難事件が連続発生している。警察庁は2008年の1年間だけでも全国で起きた寺社侵入窃盗は2千件近くに達していると発表した。窃盗件数すべてが仏像とはいえなが相当数に上るだろう。仏像ブームを背景とした盗難事件の大半は住職が居住しない無人寺が被害を受けている。無人寺の数は全国的な調査が不明だが、奈良県警の調査によると県下の無人社寺（神社も含む）は1800余りで全総数の4割。奈良県下の寺数は1400だから無人寺の多さにいまさら驚かされる。無人寺は数少なくなった檀家や地域住民たちによって辛うじて管理され、法要などは幾つかの寺の住職を兼務する僧侶に依頼してきた。無人寺でも檀家、地域の支えが残っているのはまだ幸運な方で、高齢化、過疎化による廃寺も増加している。住職の副業によってなんとか維持されてきた寺も行き詰まり廃業を余儀なくされている。今、私たちの目の前で寺が消えていこうとしている。

その一方で現在、空前の仏教ブームといわれている。

160万人が観た「国宝阿修羅展」、仏像ガールと呼ばれる若い女性たちの仏像への関心の高まり、納棺師を描いた映画「おくりびと」のヒット。また文学では高村薫「太陽を曳く馬」、天童荒太「悼む人」など仏教の生死観をテーマにした作品が関心を集めている。四国八十八ヶ所巡礼ツアーの人気も相変わらず高い。

寺が消えていく中での仏教ブーム。仏像盗難事件は相反する両者の狭間に立ち尽くす日本仏教の姿をあぶりだす。

過日、應典院で開催された末木文美士先生（国際日本文化研究センター教授）と釈徹宗先生（如来寺住職）による「対論！仏典から現代社会を問う」はこうした状況を見すえ日本仏教の可能性を探る契機を私たちの前に提示した。

葬式仏教の終焉

「事故住宅」という聞きなれない語句の後に続く「病死」、「自殺」という文字に、一瞬、ギクリとした。例年配布される大阪市営住宅募集要領のページをめくっている時だった。老後を独りで暮らすには地域のコミュニケーションが少しでもある市営住宅の方がよいだろう、との切実な思いからの毎回の申し込みも落選の憂き目が続いている。募集部屋リストの備考欄に「事故住宅」という語句が初めて登場したのは07年。その部屋で起きた「事故」を入居後に知っ

仏教の賞味期限について

辻本 耐（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程、浄土真宗本願寺派浄念寺副住職）

今回の寺子屋トークのゲストである末木文美士先生から「葬式仏教はすでに賞味期限切れである」というお話がありました。葬式仏教とは、現在の仏教教団やお寺の有り様を批判的にとらえた言葉ですが、それすらも通用しなくなっているという衝撃的なお話でした。確かに、葬儀の形態も葬儀自体を行わない「直葬」などが増えてきており、現代人の葬儀にけるウェイトは徐々に減少してきています。しかし、葬儀のあり方やその意味が変化してきていることと、仏教そのものの価値が失われていくことが誤って関連づけられているように感じます。

もともと仏教とは生きている人間との関わりのなかで語られるはずのものであり、葬儀の形式とはあまり関連がないはず。仏教が葬儀との関わりの中でしか語られなくなったことについて、僧侶はもちろんのこと檀信徒を含めた関係者全員が反省する必要があるでしょう。先生のお話を聞きながら、仏教の本当の賞味期限を決めるのは、「お葬式」ではなく、そういった人たちの「意識」であるように私は感じました。

書を説きおこし、 問いを重ねる場の楽しみ

田川 純弘（ジュンク堂書店千日前店副店長）

今回、店頭でのチラシ配布とポスター掲示に協力をさせていただきました。専門書分野では正直、あまり無いことです。しかし、秋田光彦住職からのご提案は当店の規定に無理なく当てはまるもので、スムーズに話が運びました。会場もご盛況だったとお見受けし、わずかでもお役に立てて、うれしい限りです。

釈先生も関西ではネームバリューのある兵庫大学の若手看板教授でもあります。加えてメインの末木先生は、単独著書は少ないものの明確な文体でファンがいて、多くの認識では「売れ筋」著者。神仏習合にしても論があったと思います。文章からはもっと見た目も厳しい方かと思っていましたが、違う面をお見受けし意外でした。

よく自身は特に宗派にこだわりもなく、会の後では「生國魂さん」にお参りするような男です。ただ、今の殺伐とした世相には漠とした不安を抱いており、さまざまな形で世の中に積極的に関わっていかうとされている活動姿勢には、感動いたしました。がんばってください。

初めて『寺子屋トーク』に参加して

老野生 淳一（真宗大谷派安寿寺住職）

應典院と秋田光彦氏の存在は一昨年松本市の神宮寺（高橋卓志住職）「尋常浅間学校」において初めて知った。斬新で開かれた寺院の在り方に大いに興味を惹かれた。その應典院で、幅広い学識と厳密な手法で仏典を読み解いてこられた末木文美士氏と、気鋭の宗教学者・釈徹宗氏が対談するという情報を、これまた今を時めく思想家・内田樹氏のブログで発見。関西在住の長女、釈氏を師と仰ぐ大学院生の長男と共に即日申し込んだ。

末木氏の講演は、著書から受けるイメージからは想像できないセンシティブなものだったが、釈氏との対談とも合わせ内容は、時間的制約を思えば、満足のいくものだった。が、今後さらにテーマ「仏典から現代社会を問う」内容に深く切り込んでいただければと思う。

この『寺子屋トーク』は56回にも及ぶという。仏教徒として学びの姿勢、住職としてお寺の存在意義について大きな示唆をいただくことができた。今後とも質の高い情報発信の基地として機能し続けていただきたい

時間の肌感覚を思い起こした一日

松井 千代美（ベシャワール会会員）

お寺の持つ静謐さに惹かれ、仏像のお顔に見惚れ、無意識に仏教を通しての伝統や文化に興味を持っていたにもかかわらず、私は長く密かにお寺拒否症を患ってきました。どうしても、信仰の対象として捉えた時、好きになれなかったのです。それは見聞きした僧職にある方の言動が、私の思うそれとかけはなれていたからです。教義を知っている訳でもなく、ほんの数人の出会いでしかなく、完全無欠を求めている訳ではないのですが、仏教からは距離を置いていました。

ただ今回、さまざまな人が慕い、集い、繋がるお寺での場に参加させていただき、仏教拒否症の漢方薬をいただいた気がしています。思えば、子どもの頃、近くに住む伯父の家に行くとき真っ先に仏壇に向かいお線香をあげ、手を合わせていました。それは、儀礼の中にある理解不能な他者である死者と語り共に暮らしていたのでしょうか。手を合わせている僅かな時間、一瞬背筋に入るひんやりした緊張感、そこには普遍的な正しさの理論など問題ではなく、場を感じる力、即ち死者との交流があり、癒され、生きる力を頂いていたのです。死者は閉じ込められているのではない、閉じ込める存在ではない。末木先生と釈先生の対論を伺った今、そう思います。

た住民から寄せられる苦情を事前に避けようとする行政の苦慮の結果なのだろう。

孤独死が初めて広辞苑に載ったのは08年。「看取る人もなくひとりきりで死ぬこと」この新しい語句が問題にしているのは、そもそも誰でも死ぬ時はひとりなのだから、「看取る人も」ないという部分にある。看取る人がいないから孤独な死だ、と広辞苑は定義したいようだ。

事故死、孤独死という新しい言葉が同時期に相次いで登場したのは偶然ではなく、近年、「看取る人もなくひとりで死んでいった」人は確実に増加し続けている現状が背景にある。もっとも警察庁が「変死」と扱うように定義が曖昧なこともあって明確な統計は無いが、都市再生機構が管理する賃貸住宅で06年度、孤独死が517人に上った。7年間で約2.5倍増えたそうだ。孤独死の定義を明確にし、行政、病院などが共同して総合的に統計を取ったなら数字は確実に増えるに違いない。

孤独死。看取る者が不在な状況で死を迎えざるを得ない者が増え続ける現状、つまり看取りが不在な社会を私たちは生きている。葬式仏教が形成してきた、時には煩わしさも伴う家、地域コミュニティからの自由の代償が孤独死であるとしたらあまりにも辛い。葬式仏教の終焉を直ちに孤独死に結びつけることは短絡的であるとしても、私たちが失ったものは想像以上に大きい。末木先生は葬式仏教の功罪を明らかにしつつ、日本のコミュニティ文化を底辺から支えてきた葬式仏教も「賞味期限が切れた」と指摘する。

「自分の時代」の始動

末木先生は「檀家制度は80年代に崩壊した」と指摘し、その理由として「戦前憲法を記憶している世代が社会の第一線から引いた」、つまり社会的な世代交代を挙げる。これに代わって登場したのが60年代後半に青春を送った団塊の世代に代表される戦後派。世代交代でみると80年代が戦後の始まりともいえる。

バブル景気を象徴とする80年代は人びとに尚も意識変化を促した。それまでの家や地域（寺も含まれる）また職場などの帰属社会が崩れはじめ、人びとが個人としての意識を強め様々な「自分探し」、「自



分らしさ」に新たな活路を求めた。「自分の時代」が始動したのだ。

檀家制度の崩壊に連動するかのようには80年代は様々な社会集団もまた危機に襲われた。労働組合は組織された労働者が国民全体の20%にまで落ち込んだ80年代に個人でも加盟できる「ユニオン」をスタートさせた。生活協同組合（生協）が消費者の生活スタイルが多様化し、「ご近所意識」が希薄となり従来の班活動が低迷する状況に宅配スタイルを導入したのが80年代。

この時、社会集団に厳しく問われたのは、これまでの高い位置に立って旧来の高尚な理念を声高に叫ぶスタイルからの転換であった。「ユニオン」や宅配方式は労組、生協が「自分の時代」に対応した結果といえる。

仏教をめぐる市民の発言

冒頭で述べたように無人寺、廃寺が増加し、葬式仏教の「賞味期限が切れ」、檀家制度が崩壊を迎える中で、逆に市民の仏教への関心は急速に高まりつつある。また仏教のあり方をめぐる市民の発言も目立つ。

朝日新聞の読者投稿欄である「声」を例にとってみると、この1年間で寺、葬儀、墓、戒名……仏教に関連する投稿記事数は20余り。これは紙面に掲載された数だから投稿数はその数倍だろう。朝日新聞が他紙に比べて仏教に関心が高いとも思えないし、むしろ他紙の中には日本仏教との縁が強い新聞社がある。その朝日新聞に読者がこれほどの数の仏教に関連する投稿を寄せるのには驚く。

最近の自然葬への関心の高まりを示して「お墓いらない 故郷で海葬」(69歳男NPO職員・4/3)に対して「静かに広がる自然葬の関心」(63歳主婦・4/15)の共感が寄せられ自ら海への散骨に立ち会うボランティア活動を紹介している。その一方で「供花ないお墓増えて憂える」(82歳男無職・2/24)は故郷の墓参りをした折に墓地の墓全体の3分の1以上に花1本供えられていないことに驚き、「近い将来、墓地は無くなるのではないかと心配し、「村人や親類、先祖とのコミュニケーションの場がなくなることを」憂いている。

こうした自然葬への関心や墓地の消滅への危機感の背景に縁者とのコミュニケーションが希薄となっている深刻な現実ある。「死後に迷惑? お墓撤去した」(85歳女無職・1/26)は亡き夫の墓を建てたところ自身に子どもがいなかったことから縁者に「あなたの死後は親類に何かと負担がかかると言われ、たので墓を撤去し合同墓に納骨した。この投稿に反響は大きく10日後に「墓」として2件の投稿が掲載された。「子どもの代で好きなように」(7歳女主婦)は「お葬式は家族葬」で簡素に済ませ墓は子どもたちの好きなようにすればよい、と述べる。縁者の冷たい態度にもめげない先の投稿者の姿勢に「希望失わない先輩から勇気」(5歳女教員)と共感の声も。

葬儀の簡素化を求める傾向を反映した家族葬。故人と縁があった者の意見として「最期の別れは知人も呼んで」(63歳女歯科技工士・3/31)は友人の体験を紹介する。友人のAさんは近所のBさんと親しく病院への通院にも付き添う仲だったが、Bさんが亡くなった際の葬儀に「近所の人に来て頂かなくとも結構です」と断られた。「高齢者は、行動範囲が狭くなる生活の中で、ふと心が温まるのは、近所の人と心安い会話を交わす時ではないだろうか……それなのに親

儀に当たって、親しく付き合ってきた近所の人たちのつながりをいともたやすく切り捨てる。身内だけの葬儀のよさは捨てがたいと思うが。親が頼りとしてとっていた近所の人に最期の別れの機会を提供してほしい」と結ぶ。これに「他人の参列受け入れた遺族」(93歳女洋裁業・4/11)は友人の死の際、最初、「家族だけで送ります」と参列を断った娘さんも説得に応じ、後に故人が「地域であんなに楽しく暮らしていた事に感謝」する手紙が届いたエピソードを寄せている。

庶民からは遠い仏教の世界

「庶民からは遠い仏教の世界」(48歳男会社員・4/18)は「庶民が『おくりびと』に共感するのは、納棺師が死者を大切に扱ってくれるその姿勢に感動したのだと思います。現実の僧侶は通夜や葬儀に来られるだけ。金銭で戒名を売る宗派も存在します。そんなお寺さんに庶民が『癒されたい』と思うのでしょうか」と映画「おくりびと」を観て僧侶のあり様を批判する。

「戒名断り、母は無宗教の墓へ」(52歳男会社員・11/17)は母の葬儀に菩提寺から「戒名50万円、葬儀60万円のところを計80万円にする」と説明され……高額で価格もあやふやな戒名に不信感を感じており、『要らない』と申し上げた。すると『出ていってくれ』と言われてしまった。……結局、菩提寺の墓から先祖代々のお骨も引取り、宗教的な制約の無い墓に母と先祖が俗名で安住することになったが「これでよかったのか」と投稿者は悩む。これに「お経も戒名もなしで構わぬ」(59歳女主婦・11/24)と自分たち夫婦は「葬式はお寺さんと呼ばず家族だけでし、お経の代わりに故人が好きだった曲を流します。戒名はつけません」。その理由は「お寺とは金銭を巡って長年の不信感が募り、悩みの種」だったそうだ。

投稿欄に仏教や寺のあり方、現状、不満の意見が交わされるが、そこに肝心の僧侶の姿を見ることは出来なかった。僧侶が発言しないのである。その中で他の紙面に掲載された戸次公正氏(真宗大谷派南溟寺住職)の「お経は日本語で 意味不明でありがたいのか」(9/24)で「私は日本の仏教徒の最大の忘れ物は、すべてのお経(一切経、大蔵経)の日本語訳が未完のままであることだと考えています……読んでわかり、聞いてうなずけるお経に会うことが機縁となってこそ、より奥深い仏典の世界へのアプローチが広がるものと確信しています」との主張に対して投稿欄は直ぐ応じた。「『お経は日本語で』に賛成」(78歳男無職・10/1)は「意味不明のお経に頭を垂れ、まだ終わらぬかと上目遣いに僧侶の顔を見る。自分の葬儀は音楽葬でやりたいと考えたのは、この辛抱を参列者に味わってもらいたくないと思ったのも一因だ」とする。「聖書なみに親しめるお経望む」(82歳男無職・10/20)も「お経をわかりやすい形にすることが仏教の生まれ変わり」と賛成する投稿が続いた。

仏教への期待を滲ませた批判が続く中で、最も印象に残ったのは派遣村が取り出された2008年末の「困窮者たちを仏教界救って」(7歳女主婦・12/28)だった。「ニューヨークなどでは教会が率先してホームレスに食事を提供している。日本でのお寺が早々と困っている人たちに炊き出しをしたとか、境内にテントを張って避難場所を提供したという話を聞いた事が無い。葬式仏教となり、お寺と人々

核家族化時代に問われる 「弔い」の思想と原理

今井 信行 (医療法人社団薫風会理事長 / いまい内科クリニック院長)

第1部では、末木先生の人間くささに感動したとともに、「葬式仏教は、近代日本社会の基礎を支えるに重要な役割を演じた」と同時に「賞味期限も過ぎた」という指摘は大変刺激的でした。確かに、「家」社会という概念が、近代日本を底辺から支える原動力であったことは、間違いないことでしょう。しかし、核家族化を望み、「家」からの解放を望んだのは、ほかならぬ、市民であったのではないのでしょうか？

すると、市民社会の誕生、成熟という市民の願いが、葬儀を遠ざけたと言えます。もちろん、市民社会の出現に対応できる仏教のあり方を提示できなかった現代仏教、現代の寺のあり様にも、一因はあるかもしれませんが、葬儀を遠ざけ、寺を遠ざけたのは市民そのものとも考えられます。

ただし、必ずしも葬式仏教が必要とされていない現代社会でも、「この苦に満ちた時代を、いかに処生すべきか？」という思想としての仏教は、その価値を失うものではないでしょう。実際、本日は人生の問題を見つめる場を提示いただきました。そこに「仏典から、現代社会を問う」というコピーが付けられていたことも印象的でした。文字どおり、仏教の現代的意味を問う機会でありました。

死者の他者性を喚起する 葬式仏教の意味

大井 和也 (なにわ創生塾「仏教の世界」講師)

この度の末木氏の基調講演並びに釈氏との対談における議論の土台をなしたものは、末木氏流の「他者論」である。換言すれば、『法華経』をはじめとする「仏典」を通じて、日本を取り巻く宗教の現状としての「現代社会」を「問う」ていた。

もちろん、いまを生きる者との関わり抜きに存立しえぬ社会参加仏教はいうまでもない。だが、末木氏は、賞味期限切れと評される葬式仏教こそ、他者=死者と直面せざるをえない人間にとって果たすべき役割があると説く。そこに、相互了解可能な圏域としての公共性(倫理)を超えた宗教の次元が開かれていると、実に末木らしい提言だ。

今回、仏という絶対的な他者と関わりあうところに菩薩の、ひいては大乗仏教思想の根幹を『法華経』に見て取った。それによって“他者といかに関わるか”という根本的かつ宗教的な課題が明白となった。この課題にいかにか具体的に取り組むことができるか、そこに「日本仏教の可能性」が残されているのであろう。

の関係が疎遠になったこともあるが、ここらでお寺が困っている手を差し伸べ、仏の志を示して欲しい。お釈迦様は衆生を救うためにこの世に生まれたのではなかったのか」と厳しい。これに対する僧侶の投稿は皆無だった。

僧侶と市民が共同のテーブルへ

葬式仏教の「賞味期限」が切れ、檀家制度は崩壊し、無人寺が増える中での仏教ブームは、人々が決して仏教と無縁で生きていないことを示す。問題は寺離れが急速に進行していることにある。その原因が80年代に既成帰属社会からドラスティックに人々が流出し「自分の時代」を形成し始めたにもかかわらず、日本仏教の大半が手をこまねいて傍観する姿勢を取り続けたことにあと述べたら言いすぎだろうか。「自分の時代」を揶揄し批判することは容易だ。最近の様々な事件をその視点から解くことも出来よう。また「自分の時代」に潜む危うさも視えている。しかし、「自分の時代」はまだまだ続こうとしている。そうであるなら大胆にそして柔軟に、それが仮に日本仏教本来のあり方から大きく逸脱しようとも「自分の時代」に対応することが問われているのではないだろうか。

市民から寺との距離が遠くなった、僧侶の存在が疎遠になったとの声大きい。危機感を抱いている僧侶たちからは「寺の変革」や「参加型仏教」など様々な提言と試みがされているが、同意しつつももう一つすっきりしない。それらの主張が寺を場所とし、法衣を身にまとった姿から発せられているからだ。それは僧侶として当然であるが、大半の僧侶が専従職ではない現実から眼をそらしてはいないだろうか。現在、布施だけで寺を維持し家族を養っていける僧侶は本山勤務が、檀家が何千軒もいる寺か、大手の観光寺院など一握り。大多数の僧侶は副業(僧侶は職業とも言えないのでこの表現が妥当か解らないが)で生活をし必死に寺を維持してきた。大半の僧侶は寺を一步出れば公務員、サラリーマン、パート、アルバイト、自営業者など様々な職業に従事している。私はこれが悪いと言っているのではなくむしろ日本仏教最大の強みだと言いたいのだ。僧侶は私たちの身近にいる。これほど僧侶と市民が身近に存在している仏教国はどこにあるのか。副業僧侶こそ市民であり宗派・教団の主役であるにもかかわらず、何故その地平からの発言がみられない。説法が何も高尚なものでなくとも日常のサラリーマン生活、アルバイト生活の実感を語った方がはるかに共感が得られるに違いない。

市民の側も僧侶に対して自分と同じ市民として接する事が求められる。僧侶が偉いとすれば昼間働きながら夜と休日の大半を仏教活動に費やしているからだ。しかし、昼間働き、夜間、休日を仏教に費やしている市民もいる。違うのは寺を維持管理し他人の死者儀礼に立ち会うか否かだけだ。そうであれば市民もまた過剰な期待を寺、僧侶に押し付けるのではなく、またその裏返しとしての一方的な批判を浴びせるのではなく互いが共同のテーブルを形成することが問われる。それはさほど難しくはないだろう。僧侶は既に市民であり、市民からも仏教への関心も高まっているからだ。両者の共同、協同の作業は既に着手されその萌芽も各地で芽生えている。私はそれを市民の仏教と呼びたい。そしてそれが「自分の時代」の終焉を告げるものとなる希望を抱きつつ。

田中市三 の 仏 書 探 訪

仏典をよむ―死からはじまる仏教史―

現代仏教の課題解決の糸口は仏典。古典の緻密な再読にある。仏陀入滅後、遺言書の『遊行経』を原典に『無量寿経』『法華経』『般若心経』そして日本伝承を仏教説話化した『日本霊異記』など多様な仏典が編まれた。すべてが仏陀の死から始まり、その軸足は個人救済の小乗から社会救済の大乗へと移る。経典解釈に多くの宗派祖師達が登場した。平安期の景戒、最澄、空海、鎌倉期の法然、親鸞、道元、日蓮、江戸初期のハビアン。祖師達の著作と生き様、時代背景を詳細な考証で解釈批判を加え、「思想領域」と「民間信仰や習俗、社会制度領域」の二層合体という仏教本来のあり方を見直す。仏典は難しく抹香臭いという現代人に人生の新しい意義を見出させてくれる。

末木文美士 著
●新潮社(1700円)



宗教聖典を乱読する

「宗教経典が他の書物と違うのは、へ声に出して読む」ようにできて「おり、そうでない」と「ある種の」共振現象が起きない。「特性」を持つ。その意味するところは章を追って明らかになる。一神教のヒンドゥー、ユダヤ、キリスト、イスラーム。多神を説く神道、仏教など各聖典のエッセンスと信仰形態、習俗、それらに纏わるエピソード、関連映画のコラム紹介などで各宗教宗派の実態を実に興味深く説明する。アメリカとイスラームの関係、チベット人権問題などにも触れ、現代における宗教の必要性、問題性を余すところなく提示。「一神教対多神教の枠組みの中で、「何かの宗教を選」ぶ必要に迫られた時、「なにを選」び何に「共振」すべきかにも熟慮を促す。

積 徹宗 著
●朝日新聞出版(1700円)



仏教VS倫理

死者もまたかつて生きていた歴史の事実だ。その存在は仏と共に「他者」として私達に強く関わっている。しかし現代倫理はこの重要な歴史感覚を喪失し、すべての行為行動を「生者」の視座で捉え、解決不能な問題を非科学として無視する。近現代仏教を「葬式仏教」の枠組みで捉え、蔑視排斥する。倫理のメルトダウンはそこから始まった。「仏教の本源を考え直せば」日本独自の本覚思想は「向上の契機」を喪失した。それは決して仏教の本質でもなく「倫理性の欠如」とも断定できないと言いつつ、近年注目の「社会参加仏教」に賛同し、今こそ仏教が内在する「超・倫理性を真摯に見直したい」と提言する。

末木文美士 著
●ちくま新書(740円)



不干斎(ふかんさい)ハビアン―神も仏も棄てた宗教者―

時代はその様相に従って必要な人物を世に送り出す。不安定不透明な時代、人々は絶対の価値観を求める。ハビアンは混迷の時代を駆け抜けた仏教界の異端児、いや時代を先取りした合理主義者だったのか。禅僧から改宗してキリシタン護教者、仏教儒教神道批判書『妙貞問答』を著し、林羅山と対決2年後突如棄教、女と失踪。死の前年にキリシタン批判書『破提字子』を書くハビアン。著者はその起伏と謎に富む生涯と二つの著作に綿密な照明を当てる。新村出、遠藤周作、山本七平などの様々な評価を紹介しつつ、ハビアンの宗教家としての着地点を探る。そこには「スピリチュアル・ムーブメント」との共通項も見え、苦悩するハビアンの実相とは……。

積 徹宗 著
●新潮選書(1200円)





出席者

宮原俊也

グリーフタイム主宰

尾角光美

Live on代表

Table Talk

〈生死〉の 学びの現場 から。

若者たちのスピリチュアル・グロウ

個人にとっての精神的な拠り所として、
スピリチュアリティへの関心が高まってきている。
従来の宗教観などに縛られず、
人間存在のあり方を模索しはじめた若者たち。
應典院でのNPO活動を契機として、
「生死」と向き合う実践者たちが熱く語りあう。

司会: 秋田光彦



母親の死から立ち

●秋田 まず、自己紹介とそれぞれの活動について話してもらえますか。

●宮原 臨床心理士として大阪府内にある教育機関で相談員をしています。仕事ともリンクしていますが、「グリーフタイム」を始めたのは、ほく自身が学生の頃、母親を亡くしているのが大きな要因です。グリーフというのは直訳すれば「悲嘆」ですが、ほくは大切な人やモノを失ったことによる気持ちの変化や反応を大切にしようという意味として扱っています。そういうことについて考えたら、「グリーフタイム」に来てほしいと、2009年から應典院を会場にお借りして、2か月に1回のペースで場を提供しています。いつ誰が来てもいいんです。場では時間を過ごしやすいするために、こちらが用意したワークを行う方法をとっています。手紙を書いたり、亡くす前と後の暮らしを文章に綴ったり。よくあるわかちあいの手法は使いませんが、ワークをしながら、思い思いの時間を大事に過ごしてもらっています。

●尾角 宮原さんと一緒に「グリーフタイム」の活動をしながら、「Live on」という任意団体の代表を務めています。私は大学に入る直前に母親を自死で亡くし、大学2年生からあしなが育英会で親を亡くした子どもたちを支えるグリーフの活動をしてきました。2006年に自殺対策基本法が成立してからは、各地で講演活動や「いのちの授業」もさせられています。

毎年、母の日の手紙を集めた本も制作しています。母の日という記念日の由来は、1908年に母親を亡くしたアメリカ人女性がカーネーションを捧げたのが始まりと知って感銘を受けたのがきっかけです。母の日100周年に、新聞で亡き母への手紙の投稿を呼びかけ、初めて文集を作りました。手紙によって皆がつ



大河内大博

ビハラー2事務局長・浄土宗願生寺副住職

川中大輔

シチズンシップ共育企画代表

上がる

ながら、本自身がグリーフの場になっていきます。2008年12月、10周年は、應典院でイベントをさせていただきました。

川中 市民教育のNPOを主宰しています。2007年から應典院で定期的に「生と死の共育ワークショップ」を開催していますが、その動機は祖母を亡くした個人体験がきっかけになっています。肉親を喪失しながら、死生観に対する自分自身の未成熟さをまざまざと突きつけられました。死生観は、自分がどう生きていくかという人生哲学の基本のひとつなのにもかかわらず、現代生活ではそこがすっぽりと抜け落ちている。そんな話を仲間としているうちに、デス・エデュケーション（死の準備教育）について取り組みたいと考えられるようになりました。しかも単なる一方的な教育だけでなく、参加者の内面的成長、スピリチュアル・グロウも含めて考えたいということでワークショップ形式で取り組んでいます。

應典院に初めて来た時、2階から眺めた光景に強烈な異境を感じました。死より生が充満している世の中で、死と隣り合わせの空間である應典院という場の力は大きい。日本では宗教ときちんと向き合うチャンスが非常に少ないのですが、信じる信じないは別にして、偉大なる人類の叡智のひとつですから、それにふれないのはすごくもったいない。ワークショップを通じて、一步引いた目線で死生観にふれることは、とくに重要だと思っています。

大河内 生まれ育ったお寺の副住職の仕事をして、平日は「ビハラー21」というNPOの活動と病院での傾聴ボランティアをしています。大学在学中にホスピスを知り、これこそ僧侶の天職と直感しましたが、すでに1985年にビハラーが提唱されており、実践

されている人もいました。そんなすばらしい活動がありながら、既存の仏教界は依然として何も変わろうとしない。そこに強い危機感を抱きました。すぐにでもビハラー僧になりたいという思いが募り、当時日本で唯一ビハラーの緩和ケア病棟があった新潟の長岡西病院に1年間、ボランティア・ビハラー僧を経験させていただきました。

2003年に他宗の同志と出会って立ち上げた「ビハラー21」では、安心して死んでいける社会のために、様々なケアサポートを運営しています。グループマンションや訪問介護ス

テーションに加え、つい最近では知的障害者などの自立支援のためのケアホームを始めました。高齢者施設での臨床スピリチュアルケアも行っています。自坊では、檀家さんのご遺族を中心にしたグリーフケアのわかちあいの会を実施しています。将来はお寺を守っていくのが私の役割だと思っているので、ビハラーをお寺でできる形にしていきたい。特別な環境に制限された活動では広がらないし、お坊さんという日常の立場で、何ができるかを示すことが大切と考えています。

成長のベクトルで生きない

秋田 現代のスピリチュアリティへの関心とかブームとか、若い人の立場からどう感じていますか。

宮原 スピリチュアルそのものを語るのはむずかしいのですが、ひとつ言えるのは、現代は世界が広すぎるということ。もっと狭い方が生きやすいのかもしれませんが、あまりにも間口が広くて多種多様な情報が入ってくるので、どんな価値観で生きていったらいいのかわからずに困っている人がたくさんいます。

川中 現代の若者は、周囲から「自分らしく生きる」というメッセージを全身で受け続けています。学校ではキャリア教育が流行っていますが、仕事と生き方がセットであって全然隙間がないというも、生きづらくなる要因の一つだと思います。

宮原 そもそも、生き方を模索すること自体がしんどい。もっと本能に忠実になってもよいのかもしれませんが、痛みやしんどい状況を抱えながらも、「ありのままを生きる」という考え方に惹かれます。成長とか発展とか、そういうベクトルで生き方を考えない。そういう点で、グリーフがヒントを与えてくれるような気がします。

尾角 私自身の経験を振り返ってみると、様々な活動を通して生きる意味を紡いできたように思います。でもそれは、自死遺児としての当事者性の中で「物語る場」があったからこそで、何のきっかけもなく生きる意味を模索するのはむずかしいですね。やはり共に語り合う仲間や場が必要です。私の体験は一般の若者のそれとは直接つながりませんが、異なる体験を持つ者同士が出会って語り合い始めると、そこに化学反応のようなものが起きるのを実感します。喪失体験の有無は関係なく、共有するところからそれぞれの物語へとつながっていく。若者のスピリチュアリティの起点もその辺りにあるのではないのでしょうか。

大河内 若い人たちを中心にスピリチュアルへの関心が高まっている背景には、よく言われることですが、「公」から「個」へシフトしていく動きが横たわっていると思います。どこまでも個人を追求していくにもかかわらず、社会の中での存在価値も求めていく。一人称を起点としていかに社会とのつながりを考えていくかが、若者のスピリチュアリティの特徴ではないのでしょうか。そこでは「生きる意味」とか「希望」がキーワードになっ



川中大輔

1980年生まれ。シチズンシップ共育企画代表・フアンシテーター。市民としての行動力を育む学びの場づくりに取り組む。『生きがいの哲学』を構築する『クシヨップ』の開発が最近の関心。

信仰とつまみ食い

秋田 ところで、大河内さんが、ビハーラの仕事が仏教本来の仕事だと感じた理由は何ですか。

大河内 いろいろありますが、近年の日本の仏教はずっと葬式仏教できましたが、私はそこを変えたかったという本心があります。生きた人と関わりながら、仏教のいう本来の生老病死に関わる活動を担うところに僧侶としての使命があると思ったからです。でも、最近若い人と話していると、仏教への期待はけっして小さくないな、と感じます。あまり悲観する必要はないのかもかもしれません。

尾角 私も捨てたもんじゃない派です。最近流行っている路上詩人が書く若者へのメッセージにしても、紐解けばきつと仏教的な言葉がいっぱい埋め込まれているはず。『今を生きる』とか『ありのままがいい』とか、本来、仏教が発信していたメッセージだと思います。むずかしい仏教用語を使わないだけで、内容そのものは若者の心に響いていく。つまり、若者にとって仏教の哲学や思想の力は求めているけど、これまでの枠によって届けられるものとは違うということなのでしょう。生死は絶対に誰しもが向き合う問題。それを普遍的に扱っている仏教は捨てら

れるわけがない、と思います。

宮原 ぼくは仏教の知識は全く持ち合わせてないのですが、お寺には「ゆっくりしていいんだよ」という包容力があると思います。何にも言ってくれないけど、ただお墓や仏さまを拜んで帰っていい。宗教そのものには関心はないけれど、グリーフの活動に通じる場としての魅力は感じますね。

川中 大河内さんの中では、宗教家としての立場とスピリチュアルケアの立場に矛盾はないですか。

大河内 スピリチュアルケアは、相手の主観的な世界に寄り添う態度であって、仏教の布教教化の考え方とは別のものです。でも、私自身が実感しているのですが、自分が救われる道がないと、本当にスピリチュアルな問いを発している人の声すら聞けません。そういう意味では、私自身の信仰にしっかり向き合い、救われる道の土台を築かないと、本当の意味での活動はできないと感じています。川中さんにも、内に秘めた信仰はあるのですか。

川中 私はキリスト主義教育の学校に通ったことが契機となって、聖書を今も愛読していますが、信仰という境地にはまだ至っていません。でも、最近の宗教ブームは、人生哲学ならぬ人生宗教のようなもので、信仰とはだいぶ異なるものだと思っています。教義は全く関係なく、宗教は生きるヒントであり、トリビアであって、その実体にふれている実感がない。自分の悩みを適当に宗教語で回答してもらおうと、解決したような気になる。つまり、つまみ食いをしている状況ではないかと。既存の宗教を参考にはしているが、本当の信仰にはならない。表面的なとこ

ていますが、一方で自分の中にある矛盾や混沌といったものが、実はスピリチュアリティではないのかという気もしています。組織に従属したくはないけど、会社員をしているとか、皆の役に立ちたいと言いながら、人を蹴落としていかねばならないとか。生きていく上でのサバイバルですが、それを肯定しないと生きていけない。病院の中でも、そういう混沌としたところを聴かせてもらうのが、スピリチュアルケアに携わる私たちの役割になっています。

川中 生きる意味や、自分の存在価値というのは、突きつめるほど分からなくなる。しかし、あえて言えば、分かった気にならず「かき乱す」ことがスタートではないかと思えます。その混沌の中から浮かび上がってくるものが大事でしょう。だから、悩みを抱えながら生きていく力が必要なのではないでしょうか。折り合いをつけながら、悩みながら生きていくことが、現代のスピリチュアリティではないかと思えます。



大河内大博

1979年生まれ。浄土宗願生寺副住職（特活ビハーラ21事務局長。ビハーラ僧の人材育成の他、自坊や病院等でスピリチュアルケアグリッドケアを実践。

ろだけで終始してしまう。そこが現代の宗教に共通した傾向かと思えます。

大河内 でも、ケアの現場にいると、つまみ食いでもオーケーというところがあります。信仰にはならないけれども、その日を生き延びる信念になるのではないか。いまを生きるためには不可欠なものとして、宗教が沁み入ってくれることは十分あります。わかちあいの会などに出ると、多くの人が僧侶の心ない一言に傷つけられたという話を聞

きます。現代の信仰は、いろいろな意味でリスクと裏返しかもしれない。ただ、みなさんがおっしゃるのは、亡くなった人と「もう一度会いたい」ということで、それを「また会えます」と確信を持って明言できるのは宗教家だけだと思います。

南無阿彌陀仏を唱えてもらわなくても、その一点で人が救われるのであれば、私はつまみ食いでもいいと思っています。

市民社会とスピリチュアリティ

秋田 皆さんの活動を通して、これからの抱負を聞かせてください。

川中 現代は、働いたり活動することが生きることのすべてのような語りが多いですね。しかし、生きることは、もっと多様な形で語られるべきだと思います。ワークショップなどを通じて、本来の生きる意味を取り戻すための問いかけを続けていきたいです。

宮原 正直なところ、「グリーンタイム」という活動はすごくしんどいです。ほとんど助言もしないし、何しろ成果がわからない。でも、そこを信じて大切にしていきたい。あなたを信じていますという無言のメッセージです。将来は、グリーフの施設をつくるのが夢。何も語らないけれど、きっと強いメッセージになると思います。

尾角 偏見をなくそうという運動より、自分の問題として捉えなおすことのほうが、はるかに意味がある。そのひとつのテーマが死やいのちです。光と影、また生と死が一对であるように、物事には両面性があります。成長とかポジティブという単純なものではなく、もっと混沌とした中にこそ、今の時代の

救いがある。だからこそ、「捉えなおそうよ、一緒に混沌の中に飛び込もうよ」という声を投げかけ続けたい。時代がますます複雑になっていく中で、救いを求める人に手を差しのべられるような社会を作りたいと思っています。

大河内 市民レベルでのスピリチュアリティが興隆してきたところに期待していきたいです。高齢者や障害者、赤ん坊も皆が同じ場所で共存しあうコミュニティの中に、自分自身が生きている価値を見つめる場があったり、仲間がいたり。そういう意味でのスピリチュアリティが根づいていけば、もっと成熟



尾角光美

同志社大学在籍中。グリーフのサポート、ケア、学びの機会を提供する任意団体Life on代表。1992年目の母の日に亡き母へのメッセージ（長崎出版）の編著者。心まわりと運が好き。



宮原俊也

1983年生まれ。大阪府内の教育関係機関で相談員として勤める。臨床心理士。大学院生の頃よりグリーフに関心をもち、現在グリーンタイムを主宰する。好きな野菜はブロッコリー。

した市民社会につながるのかもしれませんが。宗教家としては、お坊さんが持っている非日常的なものを積極的にスピリチュアリティに役立てていきたいですね。

秋田 宗教やスピリチュアリティの現場で活動する皆さんが、この場で出会っていただいたことは何よりうれしいですね。不安や悩みを抱え込むばかりでなく、それを核としてどう社会に還元させていくことができるか。皆さんの取り組みが應典院の立ち位置と重なってくると感じました。

これからもスピリチュアリティと市民社会との緊張関係ををいねいに保ちながら、次の社会に対する問いかけを期待しています。ありがとうございました。

ジャーナリスト

北村敏泰

Toshihiro Kitamura

死から 考え起こす 生観

シンポジウム「葬送と宗教」から
浮かび上がったもの

パネルディスカッション「葬送と宗教 死生観の視座を求めて」にコーディネーターとして参加し、様々な示唆を得た。紙幅の関係上、論議のアウトラインと筆者の考えとのごく一端を述べたい。

1

激変する葬送の意識

最初に、筆者の認識を開示したが、現在の葬送・エンディングの激変は、目覚ましい。葬儀、葬式も家族葬から直葬など様々。墓も個人墓から永代供養墓、インターネット上の「サイバーストーン」まである。また散骨や自然葬、遺骨を置物などに加工する「手元供養」、果ては、遺骨をダイヤモンドにしたり、ロケットで宇宙に打ち上げたり、環境のため遺体を「肥料」に加工したりするものもある。

いい意味で何でもありで、キーワードは、「自分らしさ」と言うか、その流れで、自分の希望する葬送のあり方や終末期医療への要望、死後の相続などのことを書き残す「エンディング・ノート」も需要が増えている。

この葬送激変の傾向には様々な背景があるが、ひとつは「多死社会の到来」だ。現在 100万人余の日本の年間の死者数は、人口推計によると 30年後の 2038年には 170万人にもなる。これは「団塊の世代」が亡くなっていくという社会要因だが、この世代の特徴はパイオニア精神というか、「何でも自分で決める」「自分らしく」ということだ。

ある葬儀会社が団塊の世代を対象にエンディングに関する意識調査をした中で、「あの世にひとつだけモノを持って行けるとしたら何か」という答えのトップは「パソコン」であった。彼らは、葬送も当然「自分らしく」と考える。

また、葬送の激変の背景には、地域社会の崩壊や家族、人と人との絆の希薄化という問題も大きいし、深刻な経済格差問題もある。

2

葬式に宗教はいらない？

しかし、この激変の流れで最も大きなものは、「脱宗教化」だ。直葬もそうだが、伝統的な仏式葬儀で実際には僧侶は添え物のようにになっているケースもあり、「葬式仏教」的な批判の中で、「もう葬式に宗教はいらない」という意見もかなりある。インターネットの葬儀紹介サイトなどでは、葬儀一式のメニューとは区別した形で、「宗教関係はオプション」としているところも多い。団塊世代が働き盛りに座右の経済誌とした、あの「エコノミスト」の葬送特集記事の見出しは「ここまで来た、葬式、墓、寺離れ」だった。

だが、これでいいのか？ 葬式、戒名など葬儀のことだけでなくエンディング全般、つまり人間が死を迎えるということに宗教が無縁であっていいのか？

仏教関係団体の「臨床仏教研究所」が40歳以上の男女 600人を対象に行った意識調査で、「信仰する宗教があることは、あなたが死に直面した時に心の支えになるか？」という問いに、「支えになる」との回答が70%に上った。また第一生命のライフデザイン研究本部による「死に対する意識」の調査でも、「信仰心」が強い人ほど「死ぬことが怖いと思わない」という答えが多くなっている。人間が死ぬことの意味付け、つまり命とは何か、ということは、とりもなおさず宗教の最大のテーマのはずだ。パネルでは、単に葬儀での役割にとどまらず、そこから現代の宗教のあり方、役割をも考えることを目指した。

3

多様化する死生観

ディスカッションでは、各パネリストが上記の葬送の激変、とりわけ「脱宗教化」を概観したうえで、葬儀自体が問題なのではなく、そのあり方、内実が問題であるという認識はほぼ共通した。

まず、葬儀という「儀礼の意義」が論議の端緒となり、廣江氏は広義での「死の受容」という葬儀文化・儀式の意味が廃れていると指摘。小林氏は、葬儀の意義を「故人が関わった人々へのお礼」として、それを欠く直葬などを批判した。だが笠原氏は、ブツダとイ



エンディング講座特別篇
パネルディスカッション
「葬送と宗教
死生観の視座をもとめて」
2009年11月21日(土)
主催 大阪YMCA人材育成・研修センター

パネリスト
小林 望 (有限会社イースター式典社取締役社長)
秋田光彦 (浄土宗大蓮寺・應典院住職)
廣江輝夫 (株式会社公益社執行役員)
笠原芳光 (京都精華大学名誉教授・宗教思想史家)
コーディネーター
北村敏泰 (ジャーナリスト)

エスの死の例を挙げ、葬儀に否定的で、この教祖らが体现した「無形の宗教性」に対して、その死後に形成された、儀礼に表象される「有形の宗教」にも懐疑的姿勢だった。

しかし論者の見解は、対立するよう見えながら、笠原氏が儀礼の対極として友人たちが故人を偲び合うという、自ら企画した葬儀の例を挙げたように、死者と生者のコミュニケーションに意義を見る立場では通底している。

秋田師は、葬儀から長い時間軸を持った葬送、エンディング全体へと問題の拡張展開を提示したうえで、生前個人墓「自然」やエンディング・サポートなどの取り組みを紹介する中で、「死は究極の公共問題」と提起した。つまり、葬送文化の伝統の衰退と地域社会・共同体の崩壊、それらの相似形としての、「自分らしさ=自分勝手」と「一人称の死」「自分だけの死生観」の蔓延を挙げ、それに対して、地域での看取りやサポートなどを具体的イメージの例としながら、「二人称の、みんなの死生観」やその行く手に展望されるであろう生活文化としての仏教、そのようなものの「結び目」としての寺の役割を示した。

筆者は、葬送・エンディングや死生観の問題は、死が究極の局面であるがゆえに当然そこから想起されはするが、実は生の問題、つまり葬儀や終末期医療の自己決定なども詰まるところ生き方の問題であり、しかも社会との関係の中での生き方の問題であると考えており、同様に宗教は当然、死だけでなく人間の生、社会的要因も含めた生の全体に寄り添うべきものだと考えている。

4

「葬式仏教はすばらしい」

お気づきのように、「葬送と宗教」という論の立て方自体、長い人の生の中の死という狭い“窓”から、本来人生全体に沿ってあるべき宗教を覗くような、歪んだものではある。だがこれは、僧侶が葬儀のスタッフたるかのように批判的に言われる「葬式仏教」の現状があるからこそであり、逆に、上記の臨床仏教研究所の意識調査にも示された、死と宗教との親和性の状況もある。K・マルクスが宗教をアヘンとしたのは、社会矛盾に背を向け自己閉塞する弊害を言ったのであり、死に直面した魂・心にとっては、宗教は積極的な意味での緩和ケアのモルヒネとしての役割が評価されるのが当然だろう。

秋田師がパネルで「(真の)葬式仏教は素晴らしい」と語ったことは、前述の“窓”から入って本来の宗教のあり方へと全面展開するという意味で、極めて納得させられる。だが逆にいえば、死生観が実は「生観」であるように、宗教が「死」からではなく語り始められ、実践されるべきものでもあるのは自明だ。ここでいう「語り」は、「宗教を論じる」とことと、「宗教に立脚した話をする」とことの両義である。

應典院でのエンディングあるいはアートなど様々な取り組みも、そのような「語り」と実践として高く評価されている。應典院には、そこで展開される例えば演劇など一見、宗教に関係のない営みでも、背景に仏教が立ち上がって来るような「場の力」があると、以前に筆者は述べた。同様に、秋田師のいう「きちんとした葬儀、葬送」が実現すれば、そこに死を通して生のすべてを見通す仏教が立ち上がる「場の力」が生じているのではないか。

5

人と人との関係性を問う

読売新聞社の「宗教意識世論調査」では、「何か宗教を信じている」という回答がわずか22.9%であるのに対して、「神や仏にすがりたいと思ったことがある」が53.9%と2倍以上だ。これは、既成の組織的な宗教は信じないが、人智を超えて自分を導いてくれる偉大な何かは信じる、ということを示している。この「何か」、言い換えれば「宗教的なもの」のうちで、既成宗教がカバーできていない部分に対して、替わりにブーム的な「スピリチュアル」が広がっているともいえるが、それがひたすら「癒し」や「優しさ」を売りにし、苦との対峙や克服の姿勢、「共苦」という関係性が希薄である点に、逆に、生老病死の生全体に寄り添う宗教の側が復権するカギもあると考える。

パネルでは秋田師が、「一人称から二人称へ」「個から公共へ」のベクトルと、「知的学習」でも「発心」でもない「第三の道」という道程とを示し、笠原氏は「宗教性」の内実として「生者の生き方こそ重要」「死生観は自分で考えるもの」と指摘した。死生観の視座の置き方は見えてきた。「宗教」をその大きなコンテンツ候補とする、その「内容」の論議はこれからだ。論議の中で浮かび上がった「人と人との関係性」がそのキーワードのひとつになるだろう。

09年7月から12月まで、大蓮寺と應典院で起きた様々な動きを、レポートします。

法輪は



エンディングセミナー 2009

死と家族をめぐる物語。 エンディングセミナー 2009 開催。

「大蓮寺・エンディングを考える市民の会」が主催するエンディングセミナーが、今年も「看取りと家族」をテーマに3回連続で開催されました。

セミナーは7月18日、遺族会でグリーンフケアにも関わる、葬儀專業最大手の公益社執行役員廣江輝夫さん、同25日在宅ホスピス医である、いまい内科クリニックの今井信行さん、8月1日、看取り体験の立場からアットホームホスピス代

表の吉田利康さんがそれぞれ講演と、また私とのトークで進めました。いずれも「看取りと家族」の体験を通して、現代の死の臨床の問題を炙り出しました。各回とも、定員の40名を超える熱心な参加者で満場となりました。

いつもながらですが、市民の関心が増大する一方で、このテーマにおける宗教者の発言が少な過ぎることをつくづく実感しています。

7月18日・25日 / 8月1日



10月8日 / 11月5日 / 12月3日



釈徹宗の經典講座

8月23日 見知らぬ死者を想う季節。 「自然・夏の集い」を隣。

大蓮寺の生前個人墓「自然」では、会員を対象に毎夏に「自然・夏の集い」を開催、今年も8月23日に40名の参加者が大蓮寺に集い、講演会、合同供養会、懇親会を実施しました。ゲスト講師は、NPO手元供養協会会長の山崎譲二さん。

いわゆる家墓とは違い、個人が自分の意志で生前に契約する「自然」では、会員どうしの生前交流を重視しており、互いを拝みあう「供養の共同体」を目指し

ています。最初はお墓がご縁で出会った者どうし、見知らぬ相手と交流を通して親睦を深め、やがて結縁のネットワークをつくっていきます。

「自然」がスタートして、すでに7年。90名の会員は多くが元気な方々ばかりですが、先に旅立たれた会員の霊をともどもに供養して、晩夏のひと時を過ごしました。

大乘は問、続ける。 釈徹宗の經典講座。

既報寺子屋トークにも出講いただいた気鋭の宗教学者釈徹宗さんの「應典院經典講座」が、10月からスタート、今回は「大乘經典を読む」と題して、10月8日「空」と「唯識」、11月5日「浄土教」、12月3日「密教」をそれぞれ講述いただきました。

多くの著作で人気の高い釈さんの講義とあって、毎回60名以上の参加があり、会場手狭なため急遽大蓮寺客殿に移動となりました。釈さんが結語とされた「大乘は問い続ける仏教である」とは、そのまま私の中枢神経に入り込んだ魅惑のフレーズでした。「そもそも大乘を3回で語りつくすなど、到底無理」(釈さん)なので、ぜひ2010年秋にも続編を準備したいと思っています。

遺志と意志と医師の間。 脳死・臓器移植を語り合う。 11月15日

11月15日、大阪市生涯学習ネットワークの事業「激論！市民のしゃべり場第2回」に主幹の山口が出講。主催は団塊アクションネットワーク。駆け出しの僧侶ながら、話題提供者として招かれた語り場のテーマは「脳死、臓器移植どう考える？」と難題でした。

主催者をして「プレゼンの魔術師」と言わせしめたプレゼンの内容は、映像素材を活用し、臓器移植の推進側（医師）、臓器移植経験者（元患者）、生命倫理の哲学者の3人の主張を並列して紹介。法律改正により、故人が家族の意志を、遺志として扱うかどうか、生命の問題と医療の問題、そしてコミュニケーションの問題と、多様な角度から熱い議論が交わされました。このテーマ、今後のひとつの柱としたいものです。

第3回浄土宗共生・地域文化大賞。 お寺とNPOの協働が続々登場。

法然上人800年遠忌事業の一つとして私が起案して、今回3回目となる「浄土宗共生・地域文化大賞」の審査会と採択式典が10月26日、総本山知恩院大殿で開催され、表彰、助成、アイデア・企画の3部門に設けられた各賞の受賞者に賞状と活動奨励金などが授与されました。

大賞150万円はNPO法人北九州ホームレス支援機構と決まりましたが、私はむしろ、お寺との協働による活動に対して助成を行う「助成部門」で、外国人

子弟への日本語支援、環境保全、過疎地の文化振興などさまざまな場面においてお寺が地域の拠点として活動していることに感銘を受けました。

まだまだお寺には眠れる資源力がある。あとはこれをいかにエンパワメントするか。運営委員長としても、いよいよ次年度4回目に向けて、知恵を絞りたいたいものです。

第3回浄土宗共生・地域文化大賞採択式典にて

10月26日



7月25日 看取る、看取られる。 「日本人と『死の準備』」出版。



以前、佛教大学四条センターにて開催された講演シリーズが、このたび「日本人と『死の準備』」という1冊にまとまり、角川SSC新書から発行されました。1部が山折哲雄先生の大論があり、2部を、なごみの里の柴田久美子さん、高野山大学の井上ウイマラさん、京都大学のカール・ベッカーさん、医師の中村仁一さん、仏教看護・ビハラー学会の藤腹明子さん

らの論で構成されています。私の講演「明日の供養を考える」もかなり圧縮していますが、所載となっています。

この講座、有料でしたがものすごい人気で、200名を超える参加者が会場からあふれたことを記憶しています。保守的な京都でさえ、その反応です。世間の関心は高まっています。

きびしい社会だからこそ 宗教の知を。 住職、主幹が 宗教間対話で発言。

11月24日

去る11月24日、橿原市の立正佼成会奈良教会で「第6回奈良宗教者フォーラム」が開催、天理教や立正佼成会の先生方と一緒に「現代社会における救い」をテーマに語りあいました。同フォーラムは、古都における宗教団体のプラットフォームで、東大寺、薬師寺、法隆寺、春日大社、橿原神宮、天理教、立正佼成会などが加盟、当日もフロアに奈良仏教の要職者が勢ぞろいされていました。

また同日、大阪のカテドラル聖マリア聖堂にて、超宗教宗派で結成された実行員委員会主催の、大阪希望館支援集会所が開催され、こちらには、主幹の山口が出講しました。若者の貧困救済をテーマに、思いやりある社会をいかに実現できるかを、宗教を超えてともに語りあいました。

死生観を語り合う、開かれたサイト。
 ブログ「みとりびとは、ゆく」がスタート！
<http://mitoribitoblogspot.com>

自分の死を創る時代

7月のエンディングセミナーと同時に、はじめてお寺で「みとりびとは、ゆく」というブログをスタートしました。セミナーの模様や私や仲間の雑感などを交えていますが、もちろん布教ブログでもなければ、仏事のFAQでもない。これを機会として個々人の死生観を僧侶もいっしょになって語り合う場として育てていきたい、と願っています。

多死社会が本格化するれば、否応なしに家庭は死の臨床となりますが、死のプロセスは医療や看護だけで受け入れられるものではない。当事者や家族の日常における死生観の成熟がとても大切だと思います。しかし、宗教なき現代では誰もが共有できる死生観がありません。中高年の自殺問題やいじめ、衝動殺人など、すべてといえませんが、日本人の死生観が基軸を欠いたまま不安に喘いでいる現状を象徴しています。私たちは、死の意味がよく見えないと同時に、生それ自体の意味もよく見えない「死生観の空洞化」（広井良典）に陥っています。

それに対し、「今こそ仏教に死生を学べ」と布教師たちは声高に言うかもしれませんが、それがそれでおっしゃる通りなのですが、個人がむき出しになった現代、昔ながらの流儀や因習に従うとも思えませんが、地域共同体が壊れ、葬儀も個人志向で多様化したように、個々の感性や価値観は、好むと好まざるとかわからず、過去から続いてきた規範を踏み越えていきます。作家の柳田邦男さんは、現代は「自分の死を創る時代」と言いましたが、まさにこれからの死生観はかつてあったものを伝承されるというより、自分たちで参加しながらデザインしていくものとして相対化されていくでしょう。

これまで伝統仏教の結束の基盤となってきたものは、血縁であり地縁でした。それが壊れて急速に個人化が進み、信仰もまた家単位から個人の宗教の時代に大きく転換していきつつあります。教義が授けられ、絶対存在

参照点としての仏教

このブログ「みとりびとは、ゆく」は檀信徒対象ではありません。無宗教の人も意識しています。そこでは、仏教は絶対的解答のものではなく、壮大な問いとして提出されるものです。「浄土宗では……と考えます」ではなく、読者に対し「あなたはどうか考えるのか」という問いかけであり、「ともに考え、ともに悩

によって救われるという受動態ではなく、自己の気づきや変容を重視していくのが、個人の宗教の顕著な傾向です。そこを檀信徒教化というフォーカス（つまり家の宗教の視線）で見ているのは、永遠にかみ合いません。このままでは、仏教は宗派とか教団という囲いを取り払うと忽ち存立不能に陥ってしまうのか、という危惧をおぼえています。

もう」というのが基本スタンスです。模範解答であればホームページで十分ですが、現代の死生観には対話型のブログがどうしても必要だったので。

書き手は私以外にも僧侶や市民数名と分担しているのですが、一貫性は乏しいかもしれませんが、仏教を共通軸としながら話題は拡張していきます。「臓器移植改正法」「衝動殺人」「安楽死」なども取り上げていますが、意識的に社会問題について仏教の死生観から問い直すことをやっているつもりです。仏教を「私事」に閉じ込めず、いかに公共的なものとなつていくのかという試みです。ここでは仏教は答えとしてではなく、重要な参照点として共有されています。

まだ始まって間もないので、コメントが続々とこのわけにはいきませんが、議論できる場をつくる、という意味では、少しずつ関心が広がっています。ネット上でどういう出会いや対話が起きるのか、毎日染しみに画面と取り組んでいます。（秋田光彦）

サリュ・スピリチュアル vol.1
 2010年 11月10日発行

編集長：秋田光彦
 編集：山口洋典・池野亮光
 写真：山口洋典
 デザイン：木村久夫

発行：應典院
 大阪市天王寺区下寺町 1-1-30
 (〒543-0076)
 電話 06-6771-7641
 Email: info@ou ten in.com
 URL: http://www.ou ten in.com



今年の7月に高知で、医療関係者の研修会に参加した。スピリチュアルケアの講演や分科会に参加したが、よく見えない。スピリチュアルという言葉の咀嚼力が大きく、解釈の幅もあるからだろう、どうも共通の定義が共有されないまま、口当たりのいいフレーズが先走っている印象がある。

同時に、このスピリチュアリティという言葉が浮上するにつれ、既成の宗教がはげしく相対化されつつあるのも事実だ。曰く組織教、教条主義、形骸化……スピリチュアリティは、そういった旧来の縛りから放たれた自由な個人の霊性運動であって、そういう新しいフィルターから見ると、伝統仏教なんてその名からして古臭い。

伝統仏教にはさらに深刻な問題があって、家制度や地縁共同体が壊れ、少子化とともに葬儀とか墓が変容していき、将来に明るい材料はない。しがみついていた「伝統」ブランドが解体すれば、日本の寺院は自然に淘汰されていくのだろうか。

應典院には、圧倒的に若者が多い。死生に関心はあっても、彼らには「伝統」の経験がない。だから、個人の感性や情報を手掛かりに、生きる意味を求めののだが、それを心理学や精神医学で解決しようとしても限界に突き当たる。スピリチュアリティの許容度は大きいですが、そこには物事を長いスパンで考える根拠となる規範がない。

唐突なようだが、なぜ應典院と大蓮寺が同じ境内にあるのか、この二つの対照的な寺が向き合うような関係にあるのか、その意味がおぼろげに見えかけている。さながら不易と流行が互いを緊張関係に置くように、スピリチュアリティと伝統仏教は何らかのレスポンスを始めつつあるのではないか。どっちがいい悪いではない。双方が寄り添い、支え合うようになりレーションから、新たな宗教の相貌が見えてくるのではないか。現場的な感覚でしかないのだが、私にはそう思える。

小紙は、サリュ本紙とは別に年1、2回の刊行を目指す。ふたつの寺で何が起こっているのか、その呼吸を報告しながら、市井の書き手による新しい宗教社会論も耕していきたい。併せてweb版も愛読してほしい。（MA）